

# 乳児を持つ母親の仲間づくりのための子ども支援センターの取り組み

○菊原 美緒（関西福祉大学看護学部）

## I. はじめに

近年、少子化や核家族化の進行、地域のつながりの希薄化などにより、地域の中で家庭が孤立しがちになり、不安を抱えながら子育てをする親は少なくない。さらに、コロナ禍の影響により、親子の触れ合いや親同士の交流の場を設けることが困難になった。このような状況のなかで、子ども支援センターは、特に4歳未満の乳幼児を対象として、安心して子どもを遊ばせることができ、育児不安を解消する場としての役割を期待されている。そこで、0歳児を持つ母親に対して、コロナ禍以後初めて対面による子育て講演会・交流会を開催した。本研究は、0歳児の母親の仲間づくりのための子ども支援センターの取り組みを報告することを目的とした。

## II. 研究方法

1. データ収集方法：2023年7月、子ども支援センターにチラシを設置して広報を行い、応募された0歳児を持つ母親を対象とし、「響き合う親と子のコミュニケーション」をテーマに約60分の講演会・交流会を実施した。内容は、①0歳児の認知機能の発達と関わり方・育児についての講演、②保育士による手遊び歌、③看図アプローチを活用した自己開示と母親同士の交流であった。終了後、参加者13人にGoogleフォームによる無記名調査の協力を依頼した。データの使用は同意する場合のみ、「同意する」に☑を記入し送信を依頼した。調査内容は、ARCSモデルを基に作成した4要因『興味』『関連性』『自信』『満足度』11項目（5件法）と、感想（自由記述）である。

2. データ分析方法：量的データは、非常にそう思う（5点）～全くそう思わない（1点）で得点配置し割合を算出した。自由記述の質的データは、頻出語に注目しKH Coderを用いて計量テキスト分析を行った。

## III. 結果

回答の得られた13件をデータとし、分析対象とした。講演会・交流会の内容について、ほとんどの母親が「楽しかった」「興味を持てた」「役に立ちそうだ」「また参加したい」と回答をしていた。また、「講演会に参加したことで自信を待つことができた」の項目は‘非常にそう思う’・‘そう思う’の割合の合計は70%・‘どちらともいえない’が30%であった。「SNSの情報と比較して理解が深まった」の項目は、‘非常にそう思う’・‘そう思う’の割合の合計は77%であった。次に、感想文は36文、分析対象数500語からなり、頻出語は多い順に「子ども」「他」「ママ」「楽しい」「交流」であった。「交流」に係る文章は、‘他のママとの交流ができて良かった’・‘自分を中心に他のママと交流できる経験は素直にうれしかった’・‘リフレッシュして楽しかった’などであった。

## IV. 考察

子ども支援センターでは、一斉授業型の知識伝達方式ではなく、親と子のふれあいや遊びを双方向で体験できるような工夫をすることで、他の母親と打ち解けた雰囲気の中で自身のことを語りあい、情報交換や気分転換の場になったと考える。このような取り組みにより、楽しく自己開示ができ、他の母親と顔が見える関係性を持つことで、子育て中の親の孤立を防ぐことにつながると考える。